

## 第7回日中人材交流ワークショップ(概要)

日中産学官交流機構主催により、2013年3月7日(木) 13:30~18:00 トヨタ九段ビル地下1階会議室において、特別企画“日本人学生は何故留学したがないのか—その阻害要因と今後の課題—”をテーマに第7回日中人材交流ワークショップを開催した。

ワークショップ開催に当たり、JAFSA(国際教育交流協議会)、科学技術振興機構中国総合研究センター、日本学生支援機構、日本学術振興会、日本語教育振興協会、アジア学生文化協会、全日本中国人博士協会、在日中国科学技術者連盟、日本新華僑華人会、日中科学技術交流協会、早大中国塾、中国留学生交流支援立志会、中国留日学人活動站の13機関のご後援をいただいた。

参加者は、国公立24大学、企業20社、財団・社団・NPO法人等15団体、独立行政法人2法人、メディア5社など約90名であった。

当機構理事長 清川佑二から開会の挨拶があった後、以下の通り基調講演、各講演、パネルディスカッションが行われた。

\* 基調講演の内容は、概ね次の通りであった。

### ○基調講演1：徳永保氏(筑波大学教授、前国立教育政策研究所所長)

テーマ「大学におけるグローバル人材の育成」

- ① 人材育成に関する大学と大学行政の課題に関しては、大学の質の保証の確保、社会的及び職業的な自立に向けた教育とガイダンスの強化が必要である。又総合的な知の創出とそれを備えた人材の育成には、マネジメント技術の開発とマネジメント能力の育成が必要である。
- ② グローバル化と大学教育、大学行政については、国際的な大学間競争の中、グローバルに通用する学位プログラム、人材育成の明確な目標を設定したプログラム等の教育情報の公表が重要である。又国境を越えた就職活動の活発な展開と促進が必要である。

### ○基調講演2：小林明氏(明治大学国際日本学部特任教授、JAFSA 副会長)

テーマ「日本人学生の海外留学の阻害要因と今後の対策」

留学の阻害要因としては、(1) 社会的要因 (2) 心理的要因 (3) 学内的要因の三つが考えられる。

(社会的要因)：1 経済の停滞と家計の悪化(可処分所得の減少)、2 就職活動と交換留学等留学時期の重複、3 国内進学事情の変化と18歳人口の減少

(心理的要因)：1 「内向き志向」(科学的な根拠がある訳ではなく、様々な要因が絡んで身動きの取れない状態になっており、内向き、内向きと連呼することによる暗示的な意味合いを持つことが多い)、2 外国への興味減退(TV、インターネットの影響で情報収集が容易となり、若者を引き付ける要素が国内にある)、3 短期語学留学による劣等感の増幅(本当は中・長期留学したいが財政的な制約があり、短期留学には参加したくない)、4 ネガティブキャンペーン的なマスコミ報道(テロ、銃撃、事故等のネガテ

ィブなニュースが中心で、ポジティブな関心を引く文化的、社会的なニュースが乏しい（学内的要因）：1 国際教育の大衆化の必要性に対する認識不足（国際教育が全学生に関わる教育であることの認識不足、1947年のUNESCO勧告の内容の認識不足と浸透不足）、2 留学プログラム・支援プログラムなど多様な学生の要望に対応できる効率的な意思決定システムがなく、権限委譲の不備により意思決定の遅延が生じる）、

\* 講演①～⑥の内容は、概ね次のとおりであった。

○講演 1：松尾泰樹氏（文部科学省高等教育局学生・留学生課長）

テーマ「日本人学生の海外留学の動向について」

- ① 日本人学生の留学に関する主な障害として、三つの側面を挙げることができる。一つは就職面（帰国後留年する可能性が大きい）。二つは経済面（経済的問題で断念するケースが多い）。三つは体制面（帰国後の単位認定が困難）助言する教職員の不足、大学全体としてのバックアップ体制が不備、先方の受入れ大学の情報が少ない
- ② 「グローバル人材」の3要素（1 語学力・コミュニケーション能力、2 主体的・積極性、チャレンジ精神、3 異文化に対する理解と日本人のアイデンティティ）を推進するため、予算面として「グローバル人材育成推進事業」（平成25年度予算額45億円）を計上し、日本人学生が世界に飛躍するためのグローバル力を徹底的に強化したい。

○講演 2：太田隆文氏（日本学生支援機構留学生事業部留学生事業計画課企画調査室長）

テーマ「海外留学生派遣の支援体制」

- ① 海外留学生派遣の支援事業として日本支援機構が行っているものとして、(1) 奨学金支援 (2) 海外留学イベント (3) インターネット等による情報提供の三つがある。
- ② 奨学金支援として、貸与型（有利子で海外/短期留学）と給付型（無利子で長期派遣/短期派遣）がある。  
貸与型の海外は、大学院進学が中心で約1,000人が定員だが、昨年、今年度と約400人と申込者は少ない。  
給付型の長期派遣は、学位取得が目的で今年は91人と少なかった。しかし、短期派遣については、25年度約1万人増えた。

○講演 3：西川修治氏（亜細亜大学国際交流センター国際交流課長）

テーマ「アジア大学における海外留学派遣プログラムの現状と課題」

- ① 海外留学プログラムとして、(1) 米国プログラム：150日間の留学 (2) グローバルプログラム：夏・春期休暇を利用した短期留学/13の国・地域から選択可能 (3) 交換派遣留学プログラム：学内選抜試験により参加者決定/1年間の本格的留学/充実した奨学金制度/アジア・北米中心に15大学で実施 (4) キャリア開発中国プログラム：150日間の中国留学/ビジネスインターンシップ/産学連携教育/中国語徹底教育/少人数制/ダブルメジャー教育、の4本柱がある。
- ② 課題として、(1) 学生のニーズに合わせたプログラム開発を如何にするか、語学習得のみの留学プログラムの限界 (2) 語学教員は万能に非ず。各プログラムの語学担当教員

と企業担当教員の複数担当制の導入 (3) 報道されない現地情報の把握 (4) 奨学金や教育ローンの拡充等がある。

#### ○講演 4：遠藤悟氏（東京工業大学大学マネジメントセンター教授）

##### テーマ「理工系大学における海外留学の動向と課題」

「いわゆる内向き志向」の原因には、学生自身によるものと、学生を取り囲む社会の環境の双方から考える必要がある。

##### (1) 学生自身によるもの

- ・日本という恵まれた環境に対する満足
- ・語学力の不安、海外の文化への対応力の不安
- ・海外留学が自身にどのようなメリットをもたらすかということの理解や知識の不足

##### (2) 社会によるもの

- ・在学中における課題として、就職活動への不安を抱えながら海外留学となる場合が多い
- ・将来設計に関する課題として、将来的なキャリアの中で、海外留学に伴う負担（特に金銭的負担）に対する見返りについて期待できる環境にない。

#### ○講演 5：宮崎雄行氏（株式会社東芝人事部グローバル人財開発担当グループ長）

##### テーマ「グローバル化と海外留学について」

- ① グローバル人財に求められるものとして、(1) コミュニケーション能力 (2) リベラルアーツ（他文化への Respect, 教養）(3) ダイバシティへの理解 (4) 専門分野・Expertise をしっかり持つ (5) バリューの共有 が挙げられる。
- ② 若手社員については、海外志向が低下していることはない。年代別（20代、30代、40代、50代）を見ても、「海外勤務をした」と答えた人は20代が約20%とトップである。又「海外勤務を会社に一任する」と答えた人は、全年代を見ても約47%～50%と高い。

#### ○講演 6：山本晶氏（東洋大学国際地域学部国際観光学科4年）

##### テーマ「海外留学の目的とインセンティブ —留学から得たものは何か—」

- ① 留学から得たものは、(1) 視野が広がり、日本を客観的に知ることができたこと (2) コミュニケーション力、語学力が身に付いたこと (3) 多文化を理解できたこと (4) 行動力が身に付いたこと、などである。
- ② 私にとって留学とは、(1) 自分を見つめ直し、将来を考えるための大事な自己投資機関 (2) 世界観を広げ、国際・グローバル意識を養うチャンスを掴むもの、と思う。

#### ○パネルディスカッション及び質疑応答

（モデレータ：小林明氏、パネリスト：太田氏、西川氏、遠藤氏、宮崎氏、山本氏）

##### テーマ「グローバル社会における海外留学の動向と今後の展望」

冒頭モデレータの小林明氏から、我々ができるだけ多くの日本人学生を海外に送り出すために何ができるのか、阻害要因を如何に軽減していくのかなど議論していただきたい旨の問題提起があった。

\*議論（意見も含む）の内容は、概ね次の通りであった。

・亜細亜大学では、就職活動のために留学を断念する学生をなるべく軽減するために、低学年のうちに留学するプログラムを設定している。（国際関係学部は2年次後期、それ以外の学部は2年次前期に5ヶ月間全員留学できる体制を取っている）

・東工大の場合は、海外の大学と交流するとき必ず就職の時期とカリキュラムの違いなどが出てくる。大学としてもアカデミックカレンダーの違いをどのように解決しながら、学生を指導して研究経験を積ませていくのが重要だと思う。

・就職活動については、当社では秋採用も実施している。採用面接に来た学生で、留学のため1年間休学した人がいるが、皆がそれだけ余裕のある学生ばかりではないので、単位互換制度を強化し十分活用できれば、阻害要因を少しでも軽減できるのではないかと思う。留学経験は結果的にはプラスになると思う。

・秋入学へとシフトすれば、就職とのコンフリクトが解消するという考えもあるかもしれないが、ギャップイヤーの問題も含めて、企業側との対話と議論を深める必要がある。

・奨学金については、海外留学奨学金のパンフレットを編集するに当たり、自治体、企業でも日本はこのままではまずいという認識が出て来ている。新しい奨学金を始める団体が、国に限らず地方自治体や民間企業で確実に増えている。

・大学関係者の方々から、グローバルに活躍する人材のためにどういうことをすればよいかと時々聞かれるが、余り狭い分野に絞ってスペシャルにしない方が良いと思う。特に技術系の方は特別なゼミをやっているが、狭い特定の分野の研究ではなく、もう少し広いリベラルアーツ、教養などの分野を取り入れたほうが、その後のビジネスに役立つと思う。

前当機構監事有山正孝から閉会の挨拶があり、今回ご後援いただいた各法人・団体等に対し謝辞が述べられ、ワークショップは無事終了した。

## プログラム

### ■ 開会挨拶

清川佑二（日中産学官交流機構理事長、日中経済協会顧問、元特許庁長官）

### ■ 基調講演

#### ① 「大学におけるグローバル人材の育成」

徳永保（筑波大学教授、前国立教育政策研究所所長）

#### ③ 「日本人学生の海外留学の阻害要因と今後の対策」

小林明（明治大学国際日本学部特任教授、JAFSA 副会長）

### ■ 講演

#### ① 「日本人学生の海外留学の動向について」

松尾泰樹（文部科学省高等教育局学生・留学生課長）

#### ② 「海外留学生派遣の支援体制」

太田隆文（日本学生支援機構留学生事業部留学生事業計画課企画調査室長）

#### ③ 「亜細亜大学における海外留学生派遣プログラムの現状と課題」

西川修治（亜細亜大学国際交流センター国際交流課長）

#### ④ 「理工系大学における海外留学の動向と課題」

遠藤悟（東京工業大学大学マネジメントセンター教授）

#### ⑤ 「グローバル化と海外留学について」

宮崎雄行（株式会社東芝人事部グローバル人財開発担当グループ長）

#### ⑥ 「海外留学の目的とインセンティブ — 留学経験から得たものは何か —」

山本品（東洋大学国際地域学部国際観光学科4年）

### ■ パネルディスカッション

「グローバル社会における海外留学の動向と今後の展望」

モデレータ：小林明（明治大学国際日本学部特任教授、JAFSA 副会長）

パネリスト：登壇者（太田、西川、遠藤、宮崎、山本）

### ■ 閉会挨拶

有山正孝（日中科学技術交流協会理事長、前日中産学官交流機構監事、元電気通信大学学長）

司会：木村 憲（日中産学官交流機構常任幹事）